

# 自伝的記憶と自己評価

Autobiographical memory and the self

遠藤 由美\*

Yumi Endo

## I.はじめに

本研究は、自伝的記憶と自己評価の関わりを検討することを目的として掲げた。近年、自伝的記憶の研究が盛んになりつつある。自伝的記憶 (autobiographical memory) は、文字通り、自分の過去についての自分の記憶である。すなわち、「私は〇〇市で生まれ、〇歳の時に△△市へ引越した」とか「私は小学校に上がる前、上京してついでに富士山に登った」「弟が池に落ちたので、泣きたいのを我慢して、暗闇の中を家まで助けを求めに走った」など、人はそれぞれさまざまな「過去」についての記憶をもっている。

比較的最近まで、自分の過去について記憶されたものは、一部脱落したり誇張されたりあるいは思い違いというような、事実との多少の誤差があるにせよ、基本的にはその人の過去に実際に起きた出来事の記憶であると考えられてきた。言い換えれば、ちょうど考古学などの領域で遺跡を発掘するように、その人の過去はその人の自伝的記憶に保存されていると考えられてきたわけである。

最近、自伝的記憶はこのような遺跡アナロジーとは異なり、単に過去の事実の記録ではなく、再生時点での積極的な再構成であると理解されるようになってきている。そのような理解の変化の契機を作ったのは、虐待に関する記憶研究であった。幼少期に虐待を受けたとの訴えが裁判に持ち込まれるケースが時にあるが、そのような事件において、虐待の証拠がまったく得られないにも関わらず、本人が被虐待経験を主張し、しかも事の「真相」を詳細にかつ確信をもって述べるというケースが相ついで報告された。そこから自伝的記憶と事実との関係が問題となり、自伝的記憶研究が本格化し始めたのである。

しかしながら、自伝的記憶研究はこれまで、主として記憶の研究者によって展開されてきたため、符号化や検索など記憶に関する普遍的法則からのみアプローチする傾向があった。だが、自伝的記憶が他の一般的出来事(たとえば、報道された社会ニュースや単語帳の単語など)の記憶とは根本的に異なり、他ならぬ自己自身についての記憶であることを考える必要がある。つまり、自伝的記憶として思いおこされたことは当人の自己そのものと密接な関わりをもっているはずだからである。このような視点に立った研究は、これまでのところほとんどおこなれていない。本稿では、自伝的記憶と自己評価との関わりについて検討することを目的とする。

## II. 関連する先行研究の概観

### 2-1. 記憶に対する信頼

一般に心理学における狭義の記憶研究は、Ebbinghaus(1880)に始まるとされているが、それよりはるかに古いギリシア時代に既に、心の構造を考える中で記憶についての論考をおこなった者がいる。Aristoteles(B.C.382-322)である。彼は、人間は視覚、聴覚、触覚などを用いて環境から感覚情報を入手すると、それを共通感覚として統合するが、それは心の中に痕跡というかたちで保持され、記憶となる、と考えた(図1)。すなわち、人間が外界から感じ取るものは真実であり、それを忠実に写し取って保存しておくのが記憶であるとして、人間の認知・記憶に対して極めて素朴な信頼を寄せたのである。

Aristotelesが唱えた「理性をもった存在」という人間観と認知・記憶能力に対する信頼感とは、その後人間を万物の霊長と考えるキリスト教文化においてますます確固としたものになり、19世紀終わりの科学的心理学の幕開け後も不問の大前提としてそのまま引き継がれることになった。

それを端的に示しているのが、忘却についての検索失敗説(Tulving & Pearlstone, 1966)である。われわれは、時にものごとを忘れてしまって思い出せないことがあるが、この説によれば、このような忘却は記憶痕跡自体が消失したのではなく、単に記憶貯蔵庫中の情報へのアクセスの失敗だというのである。彼らは、検索手がかりを与えると、記憶として思い出されるものが増えることをその証拠として示した。一步進めて言うならば、一度記憶内に取り込まれた情報は、そのままずっとそのままそこにあるということになる。これを、冒頭では遺跡にたとえた。長い歳月を経て、中には地中に埋まりこむものもあり、また欠損欠落するものもでてくるが、そうでない場合には、作られた当時のまま保持され、少なくとも要素は残るからである。人間の高次の認知・記憶に対する絶大な信頼はこうして、疑われることなく比較的最近まで引き継がれてきた。

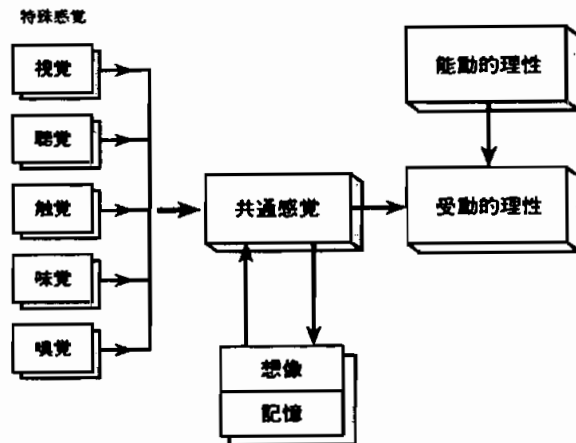


図1 アリストテレスによる心の構造 (梅本 1994より)

## 2-2. 信頼性の崩壊

近年、記憶は真実の忠実な記録を残す遺跡のような記憶痕跡ではなく、記憶はむしろ構成あるいは再構成されるものであると考える研究者がでてきた。そのような見方への道を切り開いたのは、Johnson(1981)である。彼女は、情報源モニタリング (source monitoring あるいは reality monitoring) について研究を重ね、人はしばしば自分の記憶している情報がどこに由来しているのかについて誤ることを見出した。たとえば、あることについて知っているのだが、それが本で読んだことなのか、他者から聞いた話なのか、空想したことなのか、わからないというようなことである。さらに驚くことに、それは外部の情報に限らず、自分自身が実際にとった(とらなかった)行動についても、同じような事態がおこりうる (Johnson, Hashtroudi & Linsey, 1993)。自分がやったのに、それをしたのはだれか他者だというように過去を思い出すという具合である。また、自分に関連することがらに関しては、実際のできごとなのかあるいは自分の想像や願望だったのかがわからなくなり、記憶が大きく歪むことも報告されている (Mather & Johnson, 1998)。注意しなければならないのは、報告者が偽りやでたらめを述べているのではないことである。ひとは誠実に、しかし不正確に過去を語るのである。Johnsonらの一連の研究は、昔の記憶の情報源を正確に同定するのは極めて難しいのだということを示すと同時に、人間の記憶の正確さに対して、疑問を投げかけるものであった。

Johnsonの研究と密接に関連する誤情報効果 (misinformation effect) を報告したのは Loftus (1992)である。これは、犯罪や事故などの目撃者が、オリジナルなできごとに関する誤情報を受け入れることによって、誤った「記憶」を構成してしまうことをいう。犯罪や事故を明らかにしようとする過程で、目撃者は、たとえば警察官などから事情聴取を受け、さまざまな質問を受ける。あるいは、目撃した後に、さまざまな経験をし、さまざまな情報を受け取る。たとえば、「あの人に以前から疑わしい行動をしていたといううわさだ」とか「あなたが目撃した事件は、あのテレビ番組に似ていない?」。こうした一連のやりとりの中でかわされる情報がオリジナルな記憶に影響し (オリジナル情報を破壊してしまうか、あるいは検索されにくくしてしまうだけかについては論争がある)、しばしば新たな記憶を構成あるいは創造してしまうことがあるとLoftus (1997)らは報告している。厄介なのは、自分が確かに見たことなのか、あるいは他者から吹き込まれたことなのか、情報源がわからなくなるから、本人は自分が誠実に「自分が見たこと」を報告しているのだと信じていることである。

さらに、Loftus (1997)らは、イメージ膨張効果もみいだした。これは、ある事柄に対して、イメージを何度も膨らませることを繰り返すと、現実にあったことと区別がつきにくくなり、過去の「記憶」としてかなり詳細に「思い出す」ようになることをいう。たとえば、「幼いころ、ショッピングセンターで迷子になった」という経験があるかどうかを尋ねたところ、その経験があると答えたものはほとんどいないのに、その場面をイメージすることを何度かおこなわせると、2回目、3回目と回を重ねるごとに、「ある」と答える者が増え、詳細な記憶 (たとえば、その時の状況や服装、感情など) を語る。しかし、実際には被験者はこのような体験を持たないことが、予め家族への聞き取り調査によって確認されているのである。

このような一連の研究が明らかにしたのは、記憶が文書や写真複製のような、事が生じた

時点での詳細をそのとおりに保存したもので決していない、ということであった。Alistoteles以来長い年月にわたって受け継がれてきた人間の記憶に対する信頼性は、こうして崩壊したのである。なお、これは、目撃者証言の信頼性という実社会に対する極めて影響力の大きい問題と絡んでおり、メカニズムも含めて、研究の進展が要請される場所である。

### 2-3. 自伝的記憶における構成・再構成としての記憶

自伝的記憶研究は、初期には日記法を用いておこなわれることが多かった (e.g. Linton, 1975)。日記にその日の出来事を記しておき、後で日記を見ずに思い出し、その後で再生されたものと日記の記録を照らし合わせて、記憶の性質を検討するという手法である。この発想の根底には、いかに人間の記憶が正確かを知りたいという関心があった。しかし、この方法では、対象となる情報の範囲が生活の全般にわたりそれでいて日記に記された限定された事項についての検討しかできないために、そこから得られた知見は、たとえば曜日は間違えやすいが、出来事は正しく憶えている (Linton, 1975) といったような無方向なものでしかなく、自伝的記憶研究は勢いを失っていた。やがて、Loftusらの研究が、外部の出来事から「自分の過去」にも広げられることとなり、驚くべき知見を発表し、現在もっとも活発に研究が生産される領域のひとつとなった。

彼女たちは、臨床治療を受けている人々の間で、治療中に、自分は幼児期に性的虐待を受けていたという自伝的記憶を回復させた、と主張する成人が増えていることに注目した。精神・心理的治療の対象となるクライアントは、心理的に困難な問題を経験し、苦渋にみちた感情や症状からのがれられないでいる。それは、極度な不安であったり、うつ感情であったり、不眠であったりする。治療を担当する者の中には、そのような現在は過去の心理的外傷体験 (トラウマ) に由来しており、けれどもクライアントがそれを抑圧し、十分に意識化し整理したりそれを乗り越えようとしていないために、さまざまな問題が生じていると考える傾向がある。そこで、一般に、彼らはクライアントに対して、そのようなつらい過去がなかったかを問い、断片的な記憶でもよいから語るように促し、切れ切れな思い出を繋ぎ合わせてこの全体像を明らかにするように励ます。そのような治療を、クライアントと治療者との間の信頼関係の上になつて、数ヶ月あるいは数年という長い時間にわたって展開する。そうするうちに、やがてクライアントの中には、実際にそのような外傷体験があったとして、忘れていたつらい過去を思い出す者がでてくるのである。

臨床医やカウンセラーは無論、それらの報告は真実だと信じているが、誤情報効果やイメージ膨張効果、さらに情報源モニタリング理論を知っている記憶研究者たちは、少なくともそれらの報告のうちのいくつかは、真実ではなく暗示などによる産物としての誤った記憶、つまり虚偽記憶 (false memory) ではないかと考えている (Loftus, 1993; Lindsay & Read, 1994) (注、Loftusは創造 (creation) ということばさえ使用している)。

実際、次のようなケースが報告されている (Loftus, 1997)。娘の問題で、精神的に問題を背負ってしまった母親が精神科医の治療を受けることになった。精神科医はクライアント自身が虐待を受けたことがあり、しかもそれを思い出せないと考えた。そこでその記憶を呼び

起こすために催眠など暗示的技法を用いて、記憶の回復に努力した。やがて、クライアントは、自分が性的暴行を受け、殺人を目撃し、動物と性交したという記憶を抑圧してきたと考えるようになった。また彼女は多重人格を示したが、精神科医は、それは子ども時代に性的・身体的虐待を受けたからだと説明した。最終的に、クライアントだった女性は、偽りの記憶を植え付けられたことに気がつき、その精神科医を不正医療行為で告発し、240万ドルで示談が成立した。治療を開始してからここまで、約12年間経過していた。同様なケースは他にも見られ、裁判が長引いている場合もある (Wagenaar, 1996)。

他方、Loftusらの研究とはまったく違った観点から、自伝的記憶が構成・再構成であることを主張しているのがRossによる研究である。Rossら(1986)によれば、人は自分の過去の態度を思い出す際、ものごとを経験した際に得た情報となんらかの暗黙の理論を組み合わせて、過去を再構成するという。たとえば、態度に関して人は、自分は一貫しているという暗黙の理論をもっている。そこで、常に現在の態度に合致するような想起をおこなうという。すなわち、以前あることに対して「反対」だった人が現在は「賛成」に変化している場合、自分は一貫して「賛成」してきたとし、逆に「賛成」から「反対」への変化では、自分は常に反対だったとして、過去の自分と現在の自分を一貫したものとして想起をおこなう。一貫性の法則はいかなる場合にもあてはまるわけではない。逆にむしろ、自分が大きく変化したと考える場合もある。研修や努力を要することに従事した場合、それらを終えた時点で、始める前の自分を思い出させたところ、そのような経験がない人たちに比べて、自分の力を低いと考えていた。すなわち、今自分はこのくらい力があるのだが、これは努力したからこうなのであって、それをしないうちは、相当力不足だったのだと考え、そのようなものとして過去の自分を理解するのである (Ross & Conway, 1986)。また、あることが望ましいことだという情報を与えられると (例：感情を押さえずに表現すること)、それが望ましくないことだという情報を与えられた人たちに比べて、自分はいたいの場合そうしているというように、「想起された」当該行動の従事回数が増大する (Ross et.al., 1981)。Rossによる一連の研究はいずれも、自分の過去を思い出すという作業は、それがおこなわれている現時点での自分を意味あるものとして構成し、自己の正当化肯定化することに他ならないことを示唆している。

#### 2-4. 斎藤による快比率研究

自伝的記憶における自己肯定化は、また斎藤の研究(1994,1995,1996)によって示唆されている。斎藤は、一定の時間を与え、これまでの人生においてどんなことがあったかを極めて簡単に箇条書きにしてもらい、その後で、それぞれについて、「楽しいこと (快)」「楽しくないこと (不快)」「どちらでもないこと (中立)」の快評定をおこなわせるという方法を用いた。その結果、自伝的記憶によって想起された出来事数における「快い出来事数の比率」は常に全想起数の約60%を占め、その割合は快60%、不快30%、中立約10%で極めて安定しているという (斎藤, 1996)。実際、調査対象者の年齢を児童から成人までさまざまにかえても、欧米と日本とで比較しても、性別や調査時期を変えてもこの割合は変動しなかった (斎藤, 1994)。さらに興味深いことに、1回目の自由想起から一定期間をあげ、再度想起をおこなわせるという手

続きをとると、1回目想起され2回目も同じできごとを想起したもの（重複想起）、1回目だけで想起されたもの、2回目だけで想起されたもの、いずれをとってもこの比率はほとんど変動せず、またインターバルを約半年近くに設定し、全体の中の反復想起部分を縮小した場合でも結果は同様であった。

### Ⅲ. 問題

繰り返し確認されている自伝的記憶の快比率一定現象について、斎藤自身は「人間は快フィルターを内蔵している」と主張しているが、そのメカニズムはまったく解明されていない。メカニズムを解き明かすひとつの観点として、個人差を取り上げ、自己認知自己評価といった自己理解とこの現象とがどう関わるかを検討することが考えられる。自伝的記憶とは自己が関与している物事についての記憶であり、また自己理解とはこれまでの自分の言動や感情思考などがどのようなであったかについての概括だとするなら、両者にはなんらかの繋がりがあると考えられる。自伝的記憶はその担い手もっぱら記憶研究者であったという経緯から、自己理解の問題としてはこれまでほとんど扱われてこなかった。快比率一定現象について、自己理解など個人的要因は検討されていない。自伝的記憶における快生産において、より多くの快を作り出す人とそうでない人の違いはどのようなものだろうか？

これまでの自己研究によれば、鬱の人の記憶表象は全般的にネガティブなのではなく自分のことに関してのみネガティブである (Bargh & Tota, 1988)。また、自尊感情の高い人は低い人に比べて、自分に対して肯定的であり、自分の中に快体験や快感情が多い (Taylor, 1989; Leary, et.al., 1995)。気分と記憶との関係については、既に気分状態依存効果、すなわちよい気分の時にはポジティブなことが、よくない気分のときにはネガティブなことが想起されやすいことが報告されている (Eich & Metcalfe, 1989)。もし、そうだとするなら、自尊感情の高い人の自伝的記憶は快比率がそうでない人よりも高いのだろうか？ 鬱の人はそうでない人に比べて快比率が低いだろうか？

そこで、本研究では、斎藤の方法にしたがって、自伝的記憶を調査するとともに、自己評価を測定し、両者の関係を検討することを目的とした。

### Ⅳ. 方法

概略：斎藤の方法に従って自伝的記憶を調査し、また「過去」に付け加えて、「将来」についての予測も調べることにした。さらに、個人差を調べるための質問紙をおこなった。

調査は合計3回にわたった。まず予備調査として、青年の意識調査と称して、個人差要因についての調査をおこなった。1回目は自伝的記憶と将来予測を調査し、さらに5週間後にまったく同じ調査の第2回目をおこなった。

【調査対象者】 私立大学大学生87名。

【調査項目】 (1) 自伝的記憶 (2) 将来できごと予測 (3) 個人差要因：自尊感情

(Rosenberg(1965)の自尊感情尺度を用いた)、不安尺度(山本(1988)による抑制不安尺度を用いた)。

【手続き】 自伝的記憶の調査では次のような教示を与えた。「あなた自身が記憶している(憶えている)ことがら(思い出)の中から、あなたが誕生した日から高校3年生の年の3月31日までの18年間の、自分に関するできごとについて、できるだけたくさん思い出して書いてください。思い出す時間は30分間です。ただし、自分自身で記憶していることだけを書いてください。人から聞いたり写真などを見たりして記憶しているできごとは書かないでください」。回答用紙は(図2参照)、各行に1から200までの番号をふり、一行に1つの思い出を簡条書きに書いてもらうように作成した。

番号	記憶の内容	1	2	3
1	成人式			
2	セミナー			
3	コンパ			
4				
5				

図2 回答用紙と記入例

自伝的記憶と将来できごと予測について自由記述終了後、各記述項目について感情評定をおこなった。すなわち、非常に快、快、どちらでもない(思い出せない)、不快、非常に不快の5件法で、できごとが起きた(起きる)時どのような感情を味わったか(味わうか)を評定し、各項目の回答欄に数字で記入してもらった。

第2回目調査でも、まったく同様の手続きをおこなった。ただし、次の点は第2回目だけでおこなわれた。すなわち、各被験者に第1回目の回答用紙を一旦返却し、もし第1回目調査時に思い出して書いたものとまったく同じことを第2回目で思い出した場合には、第2回目の回答用紙の各項目欄に設けられた対応欄に、チェックするように求めた。これによって、第1回目調査時と第2回目調査時で重複して思い出したものはどれかを判別するためである。

将来できごと予測については、1から50まで番号を振った記入欄からなる回答用紙を用いた。そして、将来自分が経験するであろうことを簡条書きで書くよう求めた。制限時間は10分である。ただし、将来のできごとについては、全体の時間的制約のため重複を検討しないことにした。

自尊感情尺度および不安尺度については、各々得点を算出し平均値を求めた上で、それを基準として被験者を上位群と下位群に分けた。

## V. 結果と考察

まず、斎藤方式にしたがって、自伝的記憶の項目を整理した。87名の被験者によって思い出された自伝的記憶項目数は、全体で第1回目が5,263（一人あたり平均60.49）、第2回目が5,668（平均65.15）であった。1回目だけで思い出された（独立想起）項目、2回の調査で重複して思い出された（再現想起）項目、第2回目だけで思い出された（独立想起）項目に分類し、それぞれの中で、快（「快」と「非常に快」）、不快（「不快」と「非常に不快」）、およびどちらでもない（中立）とされた項目数をカウントし、割合を求めた（図3）。これまでの斎藤の結果に比べると、やや快比率が低い傾向があるものの、全体としては、1回目と2回目の独立想起、再現想起のすべてにわたって、快、不快、中立比率はおよそ6:3:1ということができ、快比率一定という斎藤の結果（1993, 1994, 1995, 1996）は本研究においても確認された。

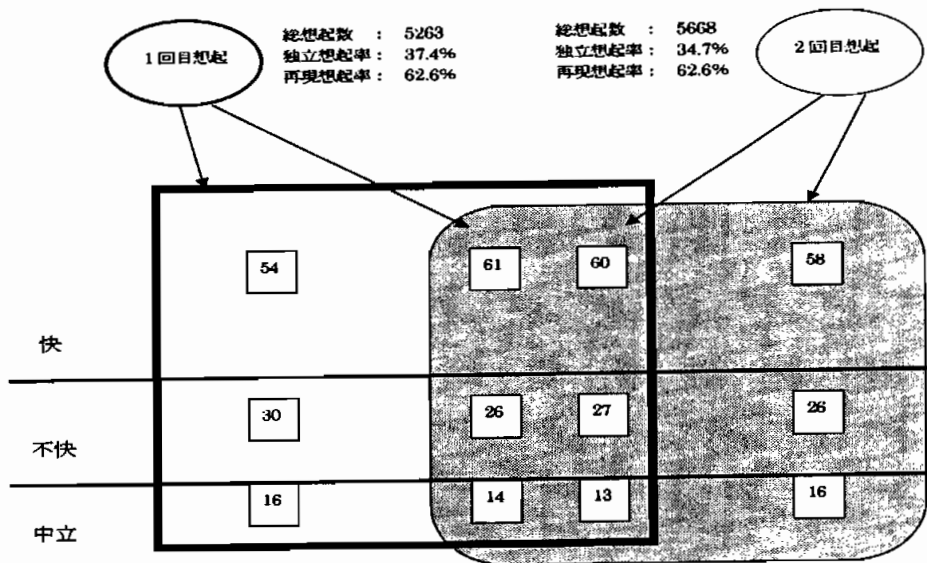


図3 反復想起実験における独立想起率、再現想起率

さて、次に、個人差要因と絡めた結果について検討する。不安尺度においては、得点は理論的には15点から90点に分布する。実際のレンジは25点から82点であった。本研究では、中央値（50）を基準に、高不安群（ $n=43$ ）と低不安群（ $n=40$ ）に分けた。各群ごとにそれぞれの感情比率を求めたところ、表1のようになった。第1回目、第2回目の過去調査とも快、不快、中立の各比率に両群で比較をおこなったが、いずれも違いは認められなかった。不安が自伝的想起の快比率に影響するとはいえない。

自尊感情についても、同様に上位下位群に分けた。自尊感情尺度の中央値（30）を基準に、高自尊感情群（ $n=43$ ）と低自尊感情群（ $n=41$ ）に分けた。各群ごとにそれぞれの感情比率を求めたところ、表2のようになった。自尊感情においても、上位群と下位群の間で快比率に違



表1 不安と感情比率 (%)

	過 去						未 来					
	第1回目			第2回目			第1回目			第2回目		
	快	不快	中立	快	不快	中立	快	不快	中立	快	不快	中立
不安低群	59.3	27.0	13.7	57.1	26.8	16.1	67.5	17.3	15.3	69.6	19.6	10.8
不安高群	56.0	26.7	17.3	56.1	28.7	15.2	63.3	21.2	15.5	60.5	22.5	17.0

いは見られなかった。つまり、自尊感情が高い人が自分の過去の楽しいできごとをより多く思い出す、ということにはなかった。

将来のできごと予測についてはどうであろうか。被験者が記述した将来のできごとは全体で第1回目が1576項目（一人あたり平均18.11）、第2回目が1664項目（平均19.12）であった。将来については、快比率が過去に比べて高い。第1回目、第2回目ともに、快、不快、中立比率は7:2:1となった（表1、表2）。つまり、実際におきた過去よりも、いまだ実現していない未来について、人は楽しいことが多いだろうと予測する傾向のあることがみいだされた。

しかし、自己要因と感情比率は関わりがあるとはいえ、わずかに不安低群において、第2回目の未来調査で、快比率が不安高群に比べて高い傾向が（ $t=1.83$ ,  $df=78$ ,  $p=.07$ ）、また自尊感情高群で低群よりも第1回目未来調査での中立比率が高い傾向が（ $t=1.7$ ,  $df=80$ ,  $p=.09$ ）、それぞれ認められたに過ぎない。

全体として、自己要因が自伝的記憶想起や未来予測における快比率に影響するとはいえなかった。では、なぜ予測どおりの結果がえられなかったか。その原因の第一として、自己評価の測定時期にあると考えられる。実施方法は、まず新入生入学直後に自己評価測定をおこない、その約1か月半後に第1回の自伝的記憶調査、さらに約1か月後に第2回目の記憶調査をおこなった。第1回目で第2回目の調査結果は斎藤のこれまでの報告とも合致しており、方法的妥当性は高い。自己評価調査は入学直後という、劇的環境変化の最中であり、そのため、不安やうつ度は各被験者の通常状態とはかなり異なったものであったと考えられる。その点については、過去や未来記述調査の直前に各被験者の自己要因を測定した上で再度検討する必要がある。また、本研究では、未来の予測も併せておこなった。その結果、「過去の事実」の想起と同様に、未来の予測においても快比率は同様な水準で見られた。このことは、人生において、楽し

表2 自尊感情と感情比率 (%)

	過 去						未 来					
	第1回目			第2回目			第1回目			第2回目		
	快	不快	中立	快	不快	中立	快	不快	中立	快	不快	中立
自尊感情高群	57.9	26.7	15.4	55.6	28.0	16.4	64.5	17.1	18.4	64.4	20.3	15.3
自尊感情低群	57.2	27.1	15.7	57.6	27.6	14.8	66.2	21.7	12.1	65.2	22.3	12.5

いことが実際によりたくさん起きている、そして自伝的記憶はそれを反映している、というよりは、人が過去であれ、未来であれ、そもそも自分の人生により多くの楽しいことを期待している、つまり、斎藤のいう「快フィルターがかかっている」という見方を支持する結果であり、他方構成ないし再構成としての記憶説を支持していると解釈できる。しかし、そのような現象がなぜ生じるのかについては依然なぞである。

## 引用文献

- Bargh, J.A. & Tota, M.E. 1988 Context-dependent automatic processing in depression: Accessibility of negative constructs with regard to self but not others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 925-939.
- Belli, R.F. & Loftus, E.F. 1996 The pliability of autobiographical memory. In D.C. Rubin (Ed.), *Remembering Our Past : Studies in Autobiographical Memory*. Cambridge:Cambridge University Press.
- Ebbinghaus, 1885 *Über das Gedächtnis : Untersuchungen zur experimentelle Psychologie*. Leipzig: Dunker & Humblot.  
 宇津木 保 (訳) 1978 記憶について (Ruger, H. A. & Bussenius, C. E. の英訳) 誠信書房
- Eich, E. & Metcalfe, J. 1989 Mood dependent memory for internal versus external events. *Journal of Experimental Psychology : Learning, Memory, and Cognition*, 15, 443-45.
- 遠藤由美 in press 自己と記憶 梅本堯夫(監修) 認知心理学の最先端 培風館
- Johnson, M. & Raye, C.L. 1981 Reality monitoring. *Psychological Review*, 88, 67-85.
- Johnson, M., Hashtroudi, S., & Lindsay, D.S. 1993 Source monitoring. *Psychological Bulletin*, 114, 3-28.
- Johnson, M. 1997 Identifying the origin of mental experience. In M.S. Myslobods (Ed.), *The mythomanias: The nature of deception and self-deception*. Pp.133-180. Mahwah, NJ:Erlbaum.
- Leary, M., Tambor, E.S., Terdal, S.J., & Downs, D.L. 1995 Self-Esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- Lindsay, D.S. & Read, J.D. 1994 Psychotherapy and memories of childhood sexual-abuse: A cognitive perspective. *Applied Cognitive Psychology*, 8, 281-338.
- Linton, M. 1975 Memory for real-world events. In D.A.Norman & D.E.Rumelhart (Eds.), *Explorations in cognition*. Pp. 376-404. San Francisco: W.H.Freeman.
- Loftus, E.F. 1992 When a lie becomes memory's truth: Memory distortion after exposure to misinformation. *Current Directions in Psychological Science*, 1, 121-123.

- Loftus, E. F. 1993 The reality of repressed memories. *American Psychologist*, 48, 518-537.
- Loftus, E.F. 1997 Creating false memories. *Scientific American*, September. 偽りの記憶をつくる 日経サイエンス 1997年12月号
- Mather, M. & Johnson, M. 1998 Emotional review and memory distortion. Paper Presented at APS 10th conference in Washington, D.C. , in May.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- Ross, M., McFarland, C., & Fletcher, G.J.O. 1981 The effect of attitude on the recall of personal histories. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 627-634.
- Ross, M. & Conway, M. 1986 Remembering one's own past: The construction of personal histories. In R.M.Sorrentino & E.T.Higgins (Eds.), *Handbook of Motivation & Cognition*. Vol.1. New York: Guilford.
- Ross, M. 1989 Relation of implicit theories to the construction of personal histories. *Psychological Review*, 96, 341-357.
- 斎藤洋典 1993 自伝的記憶(Ⅲ)：想起数と想起内容に対する想起年齢の影響 日本心理学会第57回大会発表論文集 p. 550.
- 斎藤洋典・増田尚史 1994 自伝的記憶(Ⅳ)：繰り返し実験による 想起安定性の検討 日本心理学会第58回大会発表論文集 P.830.
- 斎藤洋典・増田尚史 1995 自伝的記憶(Ⅴ)：感情を伴う想起メカニズム特性 日本心理学会第59回大会発表論文集 P.797.
- 斎藤洋典・比嘉正人 1996 自伝的記憶(Ⅵ)：重大事象による反復 想起特性の検討 日本心理学会第60回大会発表論文集 P.801.
- Taylor, S. 1989 *Positive illusions: Creative self-deception and the healthy mind*. New York: Basic Book.
- Tulving, E. & Pearlstone, Z. 1966 Availability versus accessibility of information in memory for words. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 5, 381-391.
- 梅本堯夫 1994 心理学の起源 梅本・大山監修『心理学史への招待』サイエンス社
- 山本誠一 1988 青年期における不安の二側面－「成長不安」と「抑制不安」の検討 筑波大学修士論文(未公開)堀洋道・山本真理子・松井豊(編)心理尺度ファイル 収録 垣内出版
- Wagenaar, W.A. 1997 Autobiographical memory in court. In D.C. Rubin (Ed.), *Remembering Our Past: Studies in Autobiographical Memory*. Cambridge: Cambridge University Press.

## ABSTRACT

本研究は、自伝的記憶と自己評価の関わりを検討することを目的として掲げた。近年、自伝的記憶、すなわち自分の過去についての自分の記憶の研究が盛んになってきている。比較的最近まで、自分の過去について記憶されたものは、多少の誤差があるにせよ、基本的にはその人の過去において実際に経験されたできごとの記憶であると考えられてきた。しかし、最近、自伝的記憶は、再生時点での積極的な再構成であると理解されるようになってきている。自伝的記憶研究はこれまで主として、記憶研究者によって展開されてきたため、記憶の普遍的法則を明らかにするための努力がなされ、他方、自伝的記憶が他の記憶と根本的に異なり、他ならぬ自分自身についての記憶であることに、ほとんど注意が払われてこなかった。

斎藤は、自伝的記憶において、快体験が想起される割合が常に一定であり、しかも、それはおよそ60%と高いことを指摘し、人間は快フィルターを持っていると主張している。もし、自分についての記憶想起は積極的な再構成過程だとするならば、それを生み出す自己が問題になる。つまり、自己評価が高く安定している人は、快体験をより多く想起するだろうと考えられる。

本研究では、斎藤の方法に加えて、自尊感情と不安傾向という個人要因を測定し、自伝的記憶と自己評価の関わりを検討した。斎藤のいう高快率は再現されたが、個人要因による違いは検出されなかった。つまり、自己評価が高く安定している人がより快体験を多く思い出すということはなかった。この結果は個人要因の測定方法に関して議論された。

本研究は、平成9年度奈良大学研究助成金の補助を受けておこなわれた。